

新たな産業の可能性を提案

岩手東海新聞

2007年10月26日

ミナトマチ希望セミナー 釜石湾の未来探る

釜石湾湾口防波堤の概成で生まれた約1千坪にも及ぶ湾内静穏域の有効活用などを考える「ミナトマチ希望セミナー」(県釜石地方振興局、釜石市主催)の2回目が24日、釜石市民文化会館で開かれ、今回は「新たな産業の可能性について」をテーマに釜石湾の未来を探った。

同セミナーは国土交通省釜石港湾事務所が後援し、東京大学社会科学研究所希望学プロジェクトチームが協力。約100人の市民の前に、海洋バイオテクノロジー研究所は、今世紀中ごろにも枯



微生物利用領域長の渡辺一哉さんと北里大学水産学部講師の難波信由さんが話題を提供した。

環境バイオテクノロジーの専門の渡辺さんは、今世紀中ごろにも枯

竭するとされる石油に代わるバイオエネルギーとして、微生物の力で発生させるメタンガスや微生物燃料電池の可能性を紹介。「エネルギーはどこからでもつくれ、石油がなくなってもまかなえることを認識してほしい」とした上で、「これからの暮らしは、エネルギーや環境問題を常に念頭に置いた市民生活や産業形態が重要になる」と強調した。

海藻類の養殖が専門の難波さんは、「品質は日本一、いや世界一」とする県産ワカメの育成について話した。葉の厚さや切れ込みの深さは暖流と寒流がぶつかり合う三陸の良好な環境がつくり出す」と指摘。釜石湾の有望性を考えたセミナー

「釜石湾の新たな産業の可能性を考えたセミナー」

効利用については「海水の流れが弱い湾奥でのワカメの養殖は無理だが、甲子川が供給する栄養を生かし、環境に合ったものに変えていく必要がある。みんなで作って、良い漁場をつくり上げてほしい」と期待を述べた。

「続いているパネルディスカッションでは、指導漁業士の佐々木国広さんが「湾口防波堤の完成で養殖作業のできる日が増えたのは良かったが、台風などで流れ着いたごみの撤去に時間がかかるようになった」などと功罪両面を指摘。その上で、「泉地区にできる予定の新漁場ではホヤの養殖をやってみたい」と期待を語った。

「サケの頭部などさまざまな未利用水産資源の商品化に取り組んでいる田代勝男さんは「夢物語か」

うに釜石湾を紅葉で染めるのが得意。潜水式の人誘致して文化の香り高いまちにしたい。イルカを放して見てもらうのも感動的だ」などと話した。

ワカメの刈り取り機など水産業の効率化へ向けてさまざまな機械を開発している石村真一さんは「製鉄業を中心に発達してきた釜石のものづくり」をテーマに開く。

「かもしれない」と前置きした上で、「十和田湖のよ

「製鉄業を中心に発達してきた釜石のものづくり」をテーマに開く。

同セミナーは3回シリーズで、1回目は「環境」の視点から釜石湾の活用を考えた。3回目は来年1月中旬に「まちづくり」をテーマに開く。

同セミナーは3回シリーズで、1回目は「環境」の視点から釜石湾の活用を考えた。3回目は来年1月中旬に「まちづくり」をテーマに開く。